

私の心に残つた本



流星ワゴン

医療科学部講師（リハビリテーション学科）
理学療法治療学

永井 将太

「流星ワゴン」

重松 清著

（講談社）

私も今年で30代半ばを迎えた。ちょうど、私の中ではっきりと記憶が残っている若かりし亡き父の年齢に差し掛かった。あの頃の親父（ここでは敬愛の念を込めてこう呼ばせていただく）は、子供の私にとっては、とてもなく大きな存在だった。足も速かった、力も強かった、頭も良かった、なにより威厳があった。そして、子供の頃の私には、親父が苦しむ姿の記憶がない。いつも子供の前では凛としていた。もちろん今から思えば親父は決して特別に秀逸な存在ではない。しかし、子供の頃の私には、親父の弱い姿など想像すらできない、そんな存在であった。

そして今、ちょうどあの頃の私と同じ年代に差し掛かった息子が私にもいる。つまり、私自身もあの頃の親父と同じ年代に差し掛かった。親父の立場に立ってはじめて思うことがある。仕事も、家事も、子育ても、思った以上にたいへんだ。世の中のことを考えると漠然と不安になったりもする。「あの頃、親父もたいへんだったんだな」と、同じ立場になってはじめて思うことができる。今更ながら感謝の気持ちがこみ上げてくる。

さて、前置きが長くなった。流星ワゴンは、直木賞作家 重松清の作品である。この作品には3組の父子が登場する。主人公は、死ぬことも考えるほど人生に疲れていた男。男の前にワゴンに乗った幽霊の父子が現れる。ストーリーは主人公がワゴン車に同乗し、過去へタイムスリップし、展開していく。更にそこに、余命幾ばくもない主人公の父親が、主人公と同じ年の姿で現れる。小さい頃には、ただひたすら怖く、憎い存在であった父に、同じ年という等身大で接することで父親の弱さや本音が見えてくる。

現実には起こりえないフィクションであるが、圧倒的な著者の筆力でそれを感じさせずに、リアルな展開として進んでいく。特に、同じ年になった主人公と父親の“親子”的関係が、いろいろなことを考えさせられる。重松氏がつづったあとがきに「36歳のぼくが、36歳の親父と出会ったら、僕たちは友達になれるだろうか」とい

う思いを込めて長いお話を書きつづっていった。」という一節があった。親父の背中は大きく、いつも背中を追っかけていた息子であった私にとって考えたこともない視点であり、新鮮であった。本稿の冒頭に述べた亡き父への想いは、この本を読んだ後に、感じた想いである。当たり前であるが両親にも強い部分も弱い部分もある人間であることを痛烈に思い知らされ、「子を持って知る親の恩」を改めて考えさせられた。

秋の夜長（この稿が載る頃は冬かもしれません）にお勧めの良著です。読んだ後は、きっと実家の両親に電話したくなりますよ。

